

## 「レギュラトリーサイエンス」

予測・評価・判断を伴う科学のことを言う。日本語では「規制」と言った意味にとらわれがちだが、「調整」というニュアンスを含む。従来型の科学で得られたデータや知見と、政治や行政による規制・調整・政策判断などの間にある大きなギャップを埋める「橋渡し」の役割をはたす。

## 「社会の安全」を高めるために

「基準値に出会ったらぜひ、その根拠を考えてほしい。そして分からない場合は遠慮なく、関係する行政機関や専門家に尋ねてほしい。そうしたやりとりがレギュラトリーサイエンスを育て、結果的に基準値をよりよいものにし、社会の安全を高めることにつながる。」

これが著者4人の思いなのだろう。

☆ 「基準値のからくり 安全はこうして数字になった」  
(2014年 講談社) 著 村上道夫、永井孝志、小野恭子、岸本充生

## 「史上最悪の公害」になる危惧

冒頭の放射能汚染土を全国の公共事業で再利用する問題。これを伝えているのは、まさのあつこさんの「あなたの隣の放射能ゴミ」(2017)だ。

2011年3月11日に発生した福島第一原発事故では、原子炉から大量の放射性物質が漏れ、飛散した。問題になっている「汚染土」は、居住区域の汚染された表土を剥がすことで「空間線量」を低下させ、住民の帰還を促そうというものだ。この除染にはすでに6兆円が投じられた。

## ダブルスタンダードの「被ばく」基準値

本書は、これをダブルスタンダードと厳しく批判している。国は、公衆の年間被ばく限度を1ミリシーベルト以下と設定している。しかし福島県の汚染地域では、年間20ミリシーベルト以下と別途設定している。福島県民は、20倍の被ばくを強いられているわけだ。これは「すべての国民は法の下で平等」とする日本国憲法の定めに反する。

放射能汚染土については、これまでの基準値は

100ミリベクレル/キログラムだが、この80倍の8,000ベクレル/キログラム以下であれば問題ないとした。本書にはこの不可解な基準値の決定過程の調査結果が記載されている。

放射線については、「可能な限り被ばくしない」が原則だ。医療でのレントゲン使用もむやみに使用しないし、妊婦さんには原則使用しない。地球上に生きる以上、自然放射能による被ばくは誰もが避けられないが「+ $\alpha$ による被ばく」はできるだけ避けるのが原則だ。

私たちが知らない間に、福島第一原発事故由来の汚染土が道路や堤防の資材として使われていて、地震や水害等で飛散したら、私たちは知らない間に被ばくを強いられることになる。怖いのは微粒子化した放射性物質による内部被ばくだ。

おりしも豊島(テシマ)の産業廃棄物撤去に目処がたち、水銀汚染を規制する「ミナマタ条約」が発効したばかりだ。これ以上、私たちは高い授業料を払うのはごめんだ。